

新型コロナウイルス感染症対策と大学教育活動の両立 ～医療系大学の特徴を活かした情報教育(対面授業)の実践～

庄司 一也

帝京平成大学 健康医療スポーツ学部 医療スポーツ学科

k.shoji@thu.ac.jp

帝京平成大学では、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、2020年度前期(春学期)「コンピュータ演習(コンピュータ演習Ⅰを含む)」は全学共通のオンデマンド教材を使用したフルオンライン型で実施した。そして後期(秋学期)は新型コロナウイルス感染症の状況に鑑みながら学生の健康を守るとともに十分な学修成果を確保するために、オンライン授業開講の途中から各キャンパスで対面授業を実施した(筆者は千葉キャンパスで全15回中8回目から対面授業を実施)。

筆者の対面授業では医療系大学のメリットや知見を活かした感染症対策の徹底と教育活動の両立を目指して取組んだ。本稿では上記の対面授業における効果的な感染症対策を報告するとともに、前期に作成したオンデマンド教材を活用したハイブリッド型授業について課題も含め考察・共有する。

1. はじめに

2020年度前期(春学期)は新型コロナウイルス感染拡大によって本学でも全学でオンライン授業が開講された。途中一部セミナー科目や実習科目で対面授業が実施されたが、それ以外の多くの科目はオンライン環境でオンデマンド配信またはリアルタイム型ライブ配信の授業を開講した。

そして全学必修科目である「コンピュータ演習(「コンピュータ演習Ⅰ」を含む。以下同じ)」では、教員有志で全学共通オンデマンド教材を作成し、履修者約1,500名(担当教員26名・56クラス)に配信した⁽¹⁾。同科目の後期(秋学期)は新型コロナウイルス感染症の状況に鑑みながら学生の健康を守るとともに、十分な学修成果を確保するために、途中から各キャンパスで対面授業が実施された。筆者の所属する千葉キャンパスでは全15回中の8回目(10月末)から対面授業が実施されることになった。

本稿では上記の筆者の情報教育(コンピュータ実習授業。以下「情報教育」と記す)の取組について報告する。特に医療系大学としてのメリットや知見を活かした感染症対策の徹底と教育活動の両立を目指した情報教育の取組を紹介するとともに、課題を含めて広く共有することを目的とする。

2. 作成済みオンデマンド教材の活用

対面授業がはじまったからといってすべてを教室で完結する教育・学修を展開したわけではない。前述のとおりすでに前期に共通オンデマンド教材を作成済みであったのでそれを効果的に活用した。すなわち教室での接近した対面指導(近距離で接触して操作説明等。以下「対面指導」と記す)の機

会を可能な限り減らすため、事前に解説ビデオ、補足資料、課題等をLMSで配信しそれをよく確認してもらうよう案内した。

そして教室でも学修内容の共通化を図るために、千葉キャンパス医療スポーツ学科教員(後期担当だけで4名・6クラス)で事前に相談し、対面授業を行いやすいよう共通オンデマンド教材の一部修正等も行った。さらには教材コンテンツページに掲載するLMS内の説明文・連絡事項等も共通化を図った(図1)。



図1 コンピュータ演習のLMS教材配信ページ
(説明文なども共通化を図った)

このようにオンデマンド教材を対面授業前にLMSで配信することで予習の機会と事前理解の向上を図った。そして対面指導による感染リスクをできるだけ軽減し同時に(事前の)理解度向上も図りながら教室でのスムーズな進行を期待した。

3. 教室での感染症対策

教室での対面授業が開始されることによってさまざまな感染リスクが高まるのが危惧された。

本学ではすでに学生向けに「学生行動指針」を策定し、さらには「登校時に守るルール」「コロナ注意報(不定期発行)」も作成し教務システム等で配布していた。その他にも学内施設の利用方法や国内各省庁、報道機関、医療機関などが開設するホームページなど信頼できる情報ソースを学内ツールで案内した。教職員向けには後期授業実施のガイドラインや注意事項など多数の資料が共有されていた。

そこで筆者は対面授業の際には上記各資料の重要事項を繰り返し説明した。加えて、教室座席、手指消毒、換気、ソーシャルディスタンス等について学内ルールを基に各指導を徹底した。教室での主な対策指導をまとめたものが図2である。

- 学生向け感染症対策資料の再説明
- 教職員向け授業実施資料の遵守
→その内容を学生向けに加工して説明
- 座席、手指消毒、室内換気、ソーシャルディスタンス等の各指導
- 健康管理表の再説明・入力指導
- 情報収集のための学内教務システムへのアクセス指導
- パソコンおよび周辺機器の管理方法
- 私語等注意、巡回、声かけ、その他

図2 筆者の教室での感染症対策(指導内容)

情報教育のなかでも本科目のようなコンピュータ操作を伴う実技授業では感染リスクが高まる。そのようななかで全学で取り組んでいる感染症対策を繰り返し丁寧に説明することで緊張感の維持や意識向上を図り正しい行動をとることを意図した。

4. 医療系大学のメリット活用(連携・情報共有)

すでに本学では他大学と同様に適切な感染症対策(様々な情報提供を含む)を実施し、安全性を確保したうえで対面授業の対象科目を拡大してきた。ただ上述の取組はすでに多くの大学で取組まれているものともいえる。

そこで筆者は医療系大学のメリットを活かした感染症対策を実施しながら対面授業を行うことを考えた。ここで行ったことは、「医療分野の研究者・専門家や医療系大学として十分な経験のある事務職員等との適切な連携と情報共有」である。

筆者が勤務する千葉キャンパスには医師や看護師をはじめとした医療の実務家教員が多数勤務している。そこで情報共有のほか適宜必要なアドバイスをいただき注意点なども確認し、さらには上述の感染症対策での効果的な実施方法の説明も受けた。また感染症対策の備品の紹介も受けること

ができた。そしてこれらの得られた貴重な情報を対面授業に取り入れてきた。また対面授業の前後において事務職員等との情報共有に努めた。ここでは医療系大学において長年の経験のある事務職員から多くの情報やアドバイスをいただくことができた。そしてこれらの取組(アドバイス・連携・情報共有→対面授業に活用)を繰り返すことでより安心・安全な対面授業の環境を構築できた。これらの取組を図示したものが図3である。

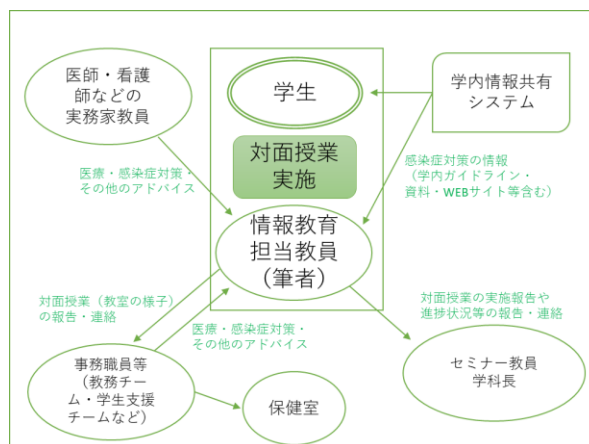


図3 学内連携と情報共有

5. おわりに

以上のとおり後期対面授業が開始されるなかで感染リスクの高い情報教育において感染症対策の徹底と学内での連携・情報共有に努めた。

今回の情報教育を通して、対面授業で感染リスクを下げつつ、可能なところはオンラインで代替するという教育・学修を進める重要性を理解できた。事前学修としてのオンデマンド教材の効果的な活用も有効であった。

一方でオンデマンド教材の未視聴、対面授業時の学生の気のゆるみ、対面授業での理解不足、対面指導時のコンピュータ操作説明等において課題が残った。これらについては引き続き情報教育担当教員と連絡を密にして改善していきたい。

現時点では新型コロナウイルスの終わりが見えない。そのようななかで大学として感染症対策を徹底しながら教育活動の両立を目指すことは責務といえる。今後も教育改善を行い得られた知見を学内外に広く発信していきたい。

参考文献

- (1) 蜂屋孝太郎ほか：全学共通科目のオンデマンド教材作成とインタラクティブ環境による学修支援～帝京平成大学 教育開発・学修支援機構の発足と成果報告～, 2020年度 私情協 教育イノベーション大会資料, p.167.(2020).